

甦る『ゴンドラの唄』

相沢 直樹著

日本の歌謡曲なりびにポピュラー音楽の原点といえ
ば、1914（大正3）年に中山晋平が作曲者として
初めて世に出した「カチューシャの唄」と、翌年の「ゴ
ンドラの唄」である。



桁違いの影響力を持つたことで、商業的なレコード歌謡は今日の音楽産業の基礎を作ることになった。

調べながら、「いのち短し、恋せよ、少女（おとめ）」の歌詞で知られる「ゴンドラの唄」の誕生の経緯がひもとされる。そして発表から30年以上の歳月を経て、黒沢明の映画「生きる」に使われたことによつて、忘れられていた歌が復活して生き返った事実を検証する。さらには歌が映画に採用されるに至つた経緯を掘り下げる、映画史に残る名作誕生の秘密にまで迫つてい

いざれも島村抱月率いる芸術座の舞台公演で、主演女優の松井須磨子が歌う劇中歌として作られた。それが評判を呼んでレコード化される一方、口伝えの流行歌として演歌師などを通じてちまたに広まつていった。

明治新政府が西洋音樂を導入して、國民教育を目的に軍歌や唱歌を普及させたのに対して、娛樂を求める大衆側に応じるかのように、大正時代になって登場してきたのが流行歌と創作童謡だった。

やがて昭和に入ると、レコード技術の発達とラジオ放送開始という新メディアとの結びつきにより、歌を創作するレコード歌謡の時代を迎える。それまでの口伝えによる歌の広がりとは

大衆文化の持つ可能性

映画「生きる」のおかげで永遠の歌、すなわちスタンダードナンバーとしての命を与えられた「ゴンドラの唄」が、誕生からもうすぐ100年を迎える現在もなお、若者向けのコミックや小説、テレビドラマなど、さまざま形で継承されている状況にも触れている。

「ゴンドラの唄」が生まれた背景から今日までを丁寧に論じることで、継承による創造という、大衆文化の持つ未来への可能性を見いだす点には、特に共感を抱いた。

(佐藤剛・作家、音楽プロ
デューサー)